

令和7年度第1回高知県環境審議会議事録

日時：令和7年7月29日（火）14時30分から16時30分

場所：高知県立県民文化ホール 4階 第6多目的室

出席委員：一色会長、石川委員、岩神委員、岡崎委員、岡村委員、康委員、古味委員、
澤村委員、高橋委員、時久委員、長門委員、濱田委員、細川委員、森委員、
横川委員

オンライン参加：井原委員、佐藤委員

事務局：林業振興・環境部部長、林業振興・環境部副部長（総括）、環境計画推進課、
その他関係課

1 開会

2 林業振興・環境部長あいさつ

3 会議録署名委員の指名

審議に入る前に会議録署名委員の指名を行う。

運営規程により会長が指名することとなっており、「井原委員」と「康委員」にお願いする。

4 報告事項

（1）水環境部会

令和7年度公共用水域及び地下水の水質測定計画について、水環境部会 井原部会長より資料1に基づいて説明を行った。

（質疑応答なし）

（2）自然環境部会

姫島鳥獣保護区特別保護地区の指定について、自然環境部会 石川部会長より資料2に基づいて説明を行った。

（質疑応答なし）

5 審議事項

高知県環境基本計画第五次計画の取組状況について、環境計画推進課 田村課長より資料3に基づいて説明を行った。

**** 休憩 ****

【一色会長】

時間となりましたので、会議を再開します。

先ほどのご説明及び資料3の内容につきまして、ご意見やご質問などがありましたら、どんなからでも結構ですのでお願いいたします。

それでは私からまず2点質問をしたいと思います。

先ほどのご説明は主に指標化されているものに対して、どの程度達成できていたのかがメインだったと思うのですが、これまでの取組、特に昨年度の取組を対象として構いませんが、指標化されていないような施策事項で、何か特筆すべき成果が上がっていたら、ぜひご紹介いただきたいと思います。

それに関連して、特に今年度の取組で、最終年度の取組として特に重視すべき事項として設定していることがありましたら、説明をお願いいたします。

【環境計画推進課長 田村課長】

指標化されていない視点でという、当課で取り組んでおります温暖化に関するものに関しましては、トータルで情報発信をするという観点から、関連する環境対策に取り組んでいる事業者様のご紹介をホームページでさせていただくということで、県民の皆様や事業者様にも環境を意識していただく取組も進めております。

今年度は特に最終年度ということで、重要視する指標のお話もございましたが、その点につきましては、この5か年の計画で立てている指標のPDCAをしっかりと回すことが、まず最初にならうかと思います。ご指摘いただいたような、指標に表れていないものに関しましても、しっかりと取組を進めてまいりたいと考えています。

【岡村委員】

この資料をずっと見てきたのですが、かなり由々しき事態が起こっています。それは森林の動的な状態、森林動態です。県を特徴付ける森林率84%が高知県のスローガンになっていて、私たちも日頃からそれを誇りに思っていると思います。ところが、この令和3年、4年、5年で見ると、この間伐率がぱっと減っているのです。本来は間伐と造林、植林はペアで行われるはずで、造林のほうは目標の半分程度の横ばい状態で、どちらも達成率は△で5割程度しかないのは、大変問題であろうと思います。それから、特に令和5年から6年にかけてはもう底を打っているというか、5割程度になってしまっています。

この数字だけを見るとこれは将来なかなか厳しいのではないかと思えるのですが、どのような検討が加えられたか、お話いただければありがたいです。

【木材増産推進課 上田課長補佐】

ご意見のとおり、間伐面積が年々減っている状況にあります。

この間伐には大きく分けて、切捨間伐と搬出間伐がございます。

苗木を山に植えて 20 年程度から間伐が必要になってくるのですが、今、高知県全体の林齢の構成がどんどん高齢化しており、間伐が必要な森林面積はじわじわと減ってきている状況になっています。間伐が段々減ってきているというのはそういったことが要因にあると考えております。

その一方で、間伐が必要な森林は確かにございますので、そういった森林は県の補助事業で支援をしております。間伐が必要な森林に対しては、支援がしっかり届くように進めているところです。

高知県の民有林の面積が 30 万ヘクタールぐらいあるのですが、この 30 万ヘクタール全ての山で、しっかりと林業をやっていくというのはなかなか現実として難しい。というのは、地形的に非常に厳しいところもありますし、道や路網が届いていないところもございます。その中で、今重要視して取り組んでいるのが、まずは条件のいいところでしっかりと森林資源を循環していくということです。県の事業の細かい話になって恐縮ですが、そういったところでは、国庫補助事業がまずベースにございまして、その上に二階建てみたいな形で、県の独自の嵩上げ事業を行ってございまして、なるべく事業者の負担が少しでも減っていくように取り組んでいるところです。

【岡村委員】

これが 3 年で急激に半減したのはどういう理由ですか。令和 3、4、5 年で、令和 6 年が横ばい。3 年でそんなに減るものですかね。やりやすいところからやってしまったということですか。

【林業振興・環境部 吉本副部長】

若干補足させていただきますが、今ご説明しておりました間伐に種類があるというのが、いわゆる抜き切りをやって森林の手入れをするというものなのですが、植えてから間もない時期で行う間伐と、ある程度 40 年、50 年育ってからやる間伐とで区別をしております。

そういった植えてから間もない時期にやる間伐というのはまだ木が細いので、それをわざわざ林の中から持ってくるというと、木材価格に対して経費がかかり過ぎてしまうということもありますので、現地に木材を残すという形をとります。それを切捨間伐または保育間伐と言っております。

今申し上げておりました搬出間伐は、40 年、50 年とある程度育って太くなっている木を木材として利用するというものを搬出間伐という言い方をしております、そちらのほうの間伐をするときにどうしても手間がかかってしまいます。

我が県の林業従事者数は 1,600 人ぐらいの横ばいで、あまり変わっていません。また、その木が育って利用期に達してきているという状況もありますので、間伐以外にも全部伐ってまた植え直すというものも現在増えてきております。

そういったこともあり、間伐に関しては面積がだいぶ減ってきていますが、森林、林業、

木材産業全体の中では、利用される木材の量は、一定程度確保は出来ている状況であり、今後、次期計画を立てる際には、間伐面積の目標やこの再生林面積の目標も、現在の資源状況に合わせてどういう目標を設定すべきかを、きちんと検討しなければいけない状況になってきていると考えております。

【岡村委員】

言い換えれば、要するにこの5年間の最初の目標が高すぎたということですね。最近の目標に合わせるために相当な理由をつけて、今お話しされたように丁寧に書いていただいて、県民にわかるようにしておいてください。数字だけ見ると何で3年で？となってしまうし、それに対して造林は横ばいでバランスが悪いんですよ。これを解るようにしていただきたいのと、もう少し詳しい説明が欲しかったと思っています。

これだと、これからこの数字からはなかなか這い出せないのではないかという感じがしました。

【石川委員】

要望が1点と、質問が1点あります。

まず要望について、19ページ、20ページの、整理番号52、53、57に関わることですが、生物多様性こうち戦略が2014年に策定され、去年改定されました。10年経って、11年目ですが、ここへ来てようやくこの評価は全部◎になっており、順調に動き出したという実感を持っております。

私はこのリーダーの養成講座やスキルアップ講座、現場体験ツアー、それから整理番号57のふるさとのおいのちをつなぐ生物多様性こうちプラン大賞を担当させていただいています。県内にいて、いろいろな環境活動を盛んにやっている団体が、一堂に会せるこうちプラン大賞や養成講座は、似たような方が集まるのですが、そこで横の連携がうまくいくようになって、現場体験ツアーなども、そういった顔見知りになった人たちが連携して動き始めています。

特にプラン大賞などで発表した中で、すごく興味を持って「ここ行きたいね」や「これを見てみたい」というような要望が参加者の方から出てきます。

ですから、その辺の動き方は非常にスムーズになってきたという印象を受けます。それで、こういう人たちの活動を支援する一つの事業として、豊かな環境づくりの総合支援事業があります。これは、去年からえこらぼの委託事業になって、できた人脈に全部連絡して応募するようにしました。そうしたらすごくたくさんの応募者が出ました。

また、今までの一般事業だけではなく、ステップアップ事業の中にジュニア枠を新設しました。

そういう活動をしている団体もよく分かってきましたし、連絡をうまくやったので、応募者もものすごく増えました。それまでは、すごく実績があるところが全部取っていき、活動

を始めたばかりのような団体が申請できるような補助金ではないという一般的認識があり、すごく低調で、いつもお金が余ってしまっていました。その挙げ句、補助金全体の総額が減らされてきたという経緯があります。

そしてここへ来て、この補助金の総額が足らなくなってきました。要望というのは、少なくとも減らされた分は元に戻してほしいということです。

ステップアップ事業には、特に若い人たち向けのジュニア枠があるのですが、これは補助金額が10万円以下です。たくさん応募が出てくるので、実績がなくてもどんどん出して、若い芽を育てるべきだと思います。この審査は書類審査のみで割とハードルが低いので、これからもどんどん応募が増えることが想定されます。

ぜひこの補助金、豊かな環境づくり総合支援事業の増額をぜひお願いしたいです。私も担当者の方に言ってみますが、申請者がもっともっと増えるような方向で考えてほしいということで申し上げております。金額が足らなくなることは目に見えていますので、ぜひご検討いただきたい。これが1点です。

それから、11ページ、12ページの、整理番号28、29辺りに該当するところですが、先ほどのご説明で、シカの捕獲頭数は目標に達していないということでしたが、鳥獣2万5000頭は結構頑張って捕っていただいている、かなり成果が上がっているところも多いと思います。

ただ先ほどのご説明の中の石鎚山系での捕獲については、自然環境、自然植生への影響が非常に顕著に出てきていまして、非常に緊急性の高い部分だと思います。

剣山系では、三嶺の森をまもるみんなの会のほうでいろいろなシカ対策をやっていますが、これは被害がひどくなってから始めたので、なかなか植生の衰退を食い止めるところまではいっておりません。どんどん劣化して行って、森林生態系がめっちゃくちゃになって、林床植物もほとんど無くなっていて、崖崩れも頻繁に起きるというような状況になっているのです。それが石鎚山系の方まで波及してきている状態なのです。

自然共生課で「石鎚山系における生物多様性保全計画」を数年前に作っています。そのとき、シカが増えたときに真っ先に守らないといけない場所を二十数か所選定しています。

その第1回目の事業を5月31日に行い、防護柵を張りました。筒上山の北側の斜面にあるキレンゲショウマは、牧野富太郎のらんまんでも出てきましたが、あのキレンゲショウマが食われ始めている。県から委託されて、牧野植物園が主導して、かなりたくさんのボランティアを集めて行いました。そういった植物が食われる場所がどんどん増え始めています。

先日もしらさ山荘に行ってみたのですが、山荘のすぐ下辺りの谷にいっぱいあったワサビが、全部食われて無いです。そのように石鎚山系の稜線にまでシカの食害が広がっています。

本当に剣山系の二の舞にならないために早くシカの捕獲をしないといけないのですが、これは高標高域なのでなかなか一般の狩猟者は行くのが難しいのです。石鎚山系の方で愛媛県と連携して捕獲するというご説明があったのですが、その辺について詳しい説明を聞

きたいと思っています。

さらに私のほうで少し意見があるのですが、まずご説明をお願いします。

【自然共生課 濱口課長】

1点目は、豊かな環境づくり総合支援事業費補助金の額が足りないのではないかというご要望をいただきまして、確かに令和6年度と令和7年度につきましては、満額で交付決定を行っており、全部は採択出来ていない状況ですが、予算の制約もございますので、ご要望がありましたということで、財政課とも協議をしてまいりたいと考えております。

また、防鹿柵の設置で希少種を守っていくというお話もいただきましたが、それについては委託先とも協議いたしまして、守らなければならないところにつきましては、柵の設置を検討していきたいと思っております。

【中山間地域対策課 小原企画監】

シカの捕獲を愛媛県と連携していくという事業について、この取組自体は今年度からやるようにしております。その石鎚山系は委員のおっしゃるとおりです。現在、この石鎚山系の植生被害が認められております。シカの生息数も増えているという推測のもとで、この事業をやるようにしています。

愛媛県との連携も、国の同じ交付金を使いまして、それぞれがこの石鎚山系で捕獲していくということで、今年度から始めている取組でございます。

【石川委員】

愛媛県は野生動物保護管理事務所などの専門家が入ってやっていると伺っていますが、高知県はそういう専門家に委託するという計画ですか。

【中山間地域対策課 小原企画監】

はい。いわゆる認定鳥獣捕獲等事業者に委託をするように予定をしております。

【石川委員】

愛媛県では、どういう所から優先順位をつけて、どういう所から先に捕獲すればいいかという情報を集めるために、ArcGISのSurvey123を使い、シカの生息情報や植生の被害情報を集めて、リアルタイムでホームページに表示できるようなシステムを愛媛大学の地理学やGISの専門家である渡邊先生のところで作っています。

シカは愛媛県だ、高知県だ、なんて言って分けて行動しているのではなくて、全部あの山域を動き回っているのだから、捕獲檻をかけないといけない場所はその時々でどんどん変わるので、そんなにどんどんは変わらないでしょうが、徐々に変わると思います。なるべく効率の良い捕獲をするためには、そういった生息情報の継続的な調査と情報収集、情報の共有

は絶対必要になってくるはずです。高知県でもそういった愛媛県で使っているシステムに参加させてもらって、ぜひやっていただきたいです。

実は前からずっと三嶺の森をまもるみんなの会のように、林野庁、森林管理局、環境省、高知県、愛媛県、徳島県の担当課が情報共有する場を持つべきだと、いろいろな所で申し上げております。この間、いの町の本川の支所の人たちと、高知大学でどういうふう組織を構築したらいいのかということをお話したのですが、そこにぜひ高知県の自然共生課と中山間地域対策課もメンバーとして加わっていただきたいと思います。

林野庁の方はまだ来ていなかったのですが、環境省の四国事務所の方も来ていて、その四者が、緊密な連携を取らないと、ただやみくもに捕りますというだけではなかなか効果が上がらないですね。ぜひそのメンバーに加わっていただきたいと思います。詳しい話は個人的に伺いますのでよろしくお願いします。

【中山間地域対策課 小原企画監】

ぜひよろしくお願いします。先ほどの情報共有の関係で、愛媛県のほうでリアルタイムで分かるシステムがあるということを、私も存じ上げていませんでしたので、そういったものも共有させていただきたいと思いますし、そういった組織作りの場がありましたら、ぜひ行かせていただきたいです。

【石川委員】

事務局の高知大学の私の後任である比嘉先生がコーディネートしてくれています。彼にも今日のお話をしておきますので、ぜひよろしくお願いします。

【時久委員】

お礼もあって、2つ発言させていただきます。

まず1つは、昨年度のこの会で、こどもエコクラブをもっと活性化をさせていくために缶バッジがあったらいいという話をさせていただいたところ、年度の終わりに県の方が作ってくださいました。

1年目が、くろしおくんが植物に水をかけているもので、2年目になった子どもには、お花が咲いて、くろしおくんがお花を持っている絵。それから3年目は、色が変わって、大きなお花にくろしおくんが座っているもので、この3種類を250個作ってくださって、ありがとうございます。

えこらぼさんが、子供の人数に対してはぎりぎり、新しく出来たクラブに配るには今のクラブの子供に配ったら足りなくなると困っていましたが、一応私の持っているエコクラブはいただきました。子供は黄色い帽子にこのお水をやっている缶バッジを1個付けて、「これでみんなに宣伝するんだ」と学校へ行っているのですが、3年やって3個付けるというのが子供の今のところの夢です。やはり缶バッジを付けることが環境を守る子供たちな

んだという意識になっていくので、大変ありがとうございました。他の学校にも広げたくて、話をしています。

8月30日に環境の杜こうちが、環境博をかるぼーとで開催するようになっているので、その時などに子供たちが呼びかけられるように、策をみんなでまた練っていかなければと考えているところです。それが1つです。

もう1つは、戦略5の整理番号52、53になります。

今の第五次計画の目標に対する進捗度が◎になっているけれど、これは本当に、当初から言ったら本当に◎だと思います。

今の子供たちの学習の状況を話して意見を言いたいのですが、この総合的な学習の時間について、五次計画が出来る少し前にコロナが流行って、子供たちが外へ学習に行きにくくなって、地域の人を呼んでの学習というのが全く出来なくなった時期がありました。

それに合わせて、文科省の指導要領が変わって、教える教育から子供たちが探究していく教育にやり方ががらっと変わったので、それに先生たちの学習が付いていけなくてばたばたした時期があります。

それから教員の世代交代がもの凄くて、学校の授業をあまり経験していない人たちがばっと入ってきたので、先生の育成に時間がかかったということもあります。それからもう1つ、働き方改革についてすごく言われたので、学校が新しいことを取り組みにくいというか、取り組まなくなったというか、やはり体験を伴うような学習がしぼんできたというのがありました。

もう1つは、ちょうどその辺りに人口問題のほうが環境問題よりも浮上している時期がありました。だから、総合的な学習の時間を組んでも、どちらかというと環境ではなくて、人口問題について県や市に提言をするような学習がすごく増えてきて、環境の取組が薄くなったので残念に思っていました。この五次計画が令和3年度から4、5、6、7と来ると、その間にやはり変化が起こりまして、今言った先生たちや学校の課題がだんだん学習を積むことによって、好良してきました。

今どうなってるかというと、探求的な学びとはどういうものかという研究が進んだことと、その研究が進んだので子供たちの学習が探究的になった。だから子供が課題をすぐ見つけるようになって、見つけたらすぐ何かをしたくなるという子供像が変わってきた。それに加えて、地球温暖化の現実が子供でもひしひしとを感じる。このままでは地球が危ないということがすごくテーマになってきて、子供たちの課題の中に、この地球を守らなくてはということが割と多く、人口問題もちろんあるし、いろいろな課題はあるのですが、こうして取り組むところが増えてきたというような感じもします。だから、この五次計画はそういった課題もあり、環境に関するいろいろな取組をしなければという姿の向上が出てきて、やっとそこまで来たと感じます。六次の計画に向けてこれから行うときには、高知県の子供は次々考えて動ける姿に変わってきているので、そこをもっと高めていくということになると思っています。

それで、この『よってたかって香美市でエコ！』というチラシです。この催しは3年目になりますが、実はエコクラブの子供たちが企画したものです。元々は環境の杜こちらの環境博に参加させてもらっていたのですが、周りを見たら高知市内の人が中心で、香美市からは誰も来ていないということにだんだん子供が気付いて、「これではいけないのではないかな。私たちが香美市でイベントを献立てできなかったらいつまでたっても出来ない。」と思うようになりました。そして、子供が主催の実行委員会を作って、共催という形でエコクラブだったり環境の杜だったり香美市だったり全国事務局だったり、えこらぼの協力や、出店をしてくれる地域の方たちと一緒に実行委員会を作り、実行委員長がエコクラブの高校生、副実行委員長も高校生で、大人と子供と一緒にやるけど子供がリードしていく、案も企画もどんどん出していくような計画です。

子供たちのことだけで話しますが、メインイベントであるセレモニーで、挨拶は実行委員長の高校生がします。それから、こどもエコクラブの発表は、今年は「Let's Cool Choice!」ということで、去年は生物多様性でやっていたのですが、今年は地球温暖化に視点を当てて、子供たちが今考えながら取り組んでいる、いわゆる探究的に学んでまとめていることを発表しようということです。

それから、初めて気候変動劇場とか、これは地球温暖化防止推進委員の仕事で、「ワリとギリギリッす」という劇の台本を作っています。それをこのような格好をしている人たちにも加わっていただいて、子供たちがこの劇をやろうということで、今年は劇でアピールして啓発をします。

下の端のこどもエコクラブ「Let's Cool Choice!」と書いてあるところの、「～地球温暖化を防止するために、行動しよう！～」というのがこどもエコクラブのコーナーです。ここは日頃の取組を展示したり、ひまわり乳業だったり、県の下水処理所の例だったり、野市動物公園の動物の糞を使った堆肥だったり、そういうのを捨てずに利用して堆肥を作っていくということも啓発しながら、子供なりに地球は私たちがこうすれば少しでも良くなるのではないかなというような発表をしていこうとしています。

内容を少しお話したのは、要は子供ってそんなもんだということ。大人が企画してこれしようよみたいなことではなく、子供にどうしようかと言ったら、「ああやったらこうやったら」と言いながら、あっちへ走りこっちへ走りしながら組み立てる。このチラシのどこかに名前があると思うのですが、岩村君というこどもエコクラブの高専の子供です。実行委員長は山田高校の子供だったり、本当にいろいろな学校の子供たちが一緒になってやっています。子供も大人と一緒にいうか、このことが大事と思ったら突っ走って行くのです。

当初から言うと、教育の中身が子供たちが自ら学ぶ姿に変わってきているので、ぜひその方向でこれからも応援をしていきたいと思ったことです。

【自然共生課 濱口課長】

1点目の缶バッチの件は、昨年度、自然環境部会でいただいたご意見かと思います。予算

に限りがあり 250 個しか作れませんでした、子供たちに喜んでいただいて、またバッチを見てエコクラブに入っていただく子供さんが増えればいいと思います。

また、バリエーションも増えればいいということで、予算を見ながら考えていきたいと思っています。

2 点目の子供さんが主体的にというお話で、エコクラブさんは去年、生物多様性こうちプラン大賞にも応募していただきましたし、今年も先ほどの豊かな環境づくりの補助金を使っていますので、主体的にやっていただけるというご意見がその通りだと思います。それをバックアップ出来るようなことを考えていきたいと思っています。

【一色会長】

関連して、これは総合部会長としての意見です。第五次計画の仕様では、やはりリーダーの養成がメインになっていて、そういうリーダーを元にどういう活動をされているのかというのはなかなか指標になりにくいところがあるのですが、先程の時久委員のご意見や石川委員のご意見にあるように、実際には自発的に行動する若い人が増えてきているという状況の中で、それをどういうふうに指標化するかというのは総合部会等で検討してみたいと思っています。

また、細かいことになりますが、資料 3 ページ、県庁職員の 520 運動への参加率を目標として挙げていて、その取組を大幅に見直すこととしたとありますが、どのような見直しをしているかの説明をお願いします。

【交通運輸政策課 大西主事】

県庁職員の 520 運動ということで、県庁職員に対して公共交通の利用を促進していたところですが、あまり利用が伸びていないので取組を見直すこととしております。その取組について今計画しているのが、職員の出張です。出張に公用車ではなく積極的に公共交通を利用して下さいという啓発をしていこうと予定しております。まだ策を練っているところなので、あまり具体的なところは出せないのですが、職員の出張に焦点を当てて取組を見直す予定をしております。

【一色会長】

このところは公共交通機関の利用促進ということですので、県庁の職員だけがどれだけ頑張ってもマスとしては極めて小さいために、実は、そういった行動を見せて県民の行動変容を促すという意味での象徴的な事業にしかならないと思います。

だから、ここはやはりもう少し実効性のある施策を、次の環境基本計画では検討する必要があります。

もう 1 点、7 ページ。これは目標としてはマップをつくるとか、実績調査を行うということで、実態把握に重点があって、対策をどうするかということまでなかなか行き着いてい

ないという状況があるのですが、実際こういったマップやその調査結果がどのように活用されているのかということです。実際何かやったことがありましたら、ご説明をお願いします。

【環境対策課 甲藤課長補佐】

プラスチックごみの調査で、水環境部会でも何度かご報告させていただいていますが、高知県では、陸域から海洋へ流出するプラスチックの組成について、衛生環境研究所で調査を行っております。

詳細な組成分析までには至っていないのですが、ペットボトルより人工芝など繊維のものが多ということです。ペットボトルにつきましては、昨年度に、県立図書館で図書展示を行いました。あわせて、自動販売機横のペットボトルを回収する所にごみが捨てられることによって、ペットボトルが回収し切れずに、それが散逸して海の方へ行くのではないかなということなので、それについて四国4県と連携して、SNSなどで動画で啓発を行ったり、先ほど申し上げましたように図書展示と連動したプラスチックのペットボトルの回収などの啓発を行ったりしているところです。

組成の分析は引き続き行っていまして、海洋プラスチックやそういった陸から供給されるものにつきましては、割合の高いところに向けて、効果的な啓発、発生抑制のPRをやっていこうと思っております。現時点では県民の皆様に向けて、ペットボトルをきちんと分別して回収、再利用できるように処理してくださいというPRを行っている状況でございます。

【長門委員】

個別の事項ではないのですが、資料4の六次計画の策定スケジュール案についてです。現在の計画は今年度末で終わって、途切れなく次年度から六次計画がスタートするというスケジュールになっていると思うのですが、現在の計画をどう評価するかということと、それを取り入れた次の計画の立案が並行で進んでいくというスケジュールに今年度はなっているのですが、このスケジュール表を見ると、基礎調査に、例えば現行計画の検証や、計画目標・施策検討というのが入っています。

今日この審議会で見ているのは令和6年度、7年度の進捗管理シートで、現行計画の検証に必要な資料や検証作業などは、現在7月末ですが8月、9月で実施する計画になっています。このあたりの具体的な作業があまり見えてこないのですが、その現行計画の検証をするために必要な資料は、また新たに何か作成するものなのかどうか、またそれをどういうふうに見ていくのか、その具体的な作業について少し教えていただければと思います。

【環境計画推進課 田村課長】

第六次計画に向けた改定作業の、現行計画の評価の検証作業についてですが、新たに資料

を作成するというよりは、今取りまとめてご報告させていただきました資料3の部分をもう少し丁寧に掘り下げていくことによって、現行計画への評価・分析をさせていただきたいと考えております。

その上で、次期計画にどう組み入れるかは、総合部会でさらに議論を深めますが、考え方といたしましては、当然今回の現計画での分析・検証を反映をさせながら、また、この5年間の状況も変わってきておりますので、現在の状況等も反映させて、次期計画を策定していきたいというスケジュールで組んでいるところでございます。

【一色会長】

基本的にはやはり計画の空白期間を作らないという前提で進めていますので、そういう意味では、最終の評価が出来ないのですが、その時点までに出来る評価に基づいて計画を作成していくという考え方で臨んでおります。それともう1点は、実は第五次計画は2030年を見越して10年間の計画の前半という位置づけで実施してきましたので、次の六次の計画は基本的には大きな項目の立て方については第五次と変えないで、でもこの間の状況の変化に対応するような形で調整を行った上でやっていく、という考え方で臨むようにしております。

それにつきましては、随時必要があれば、審議会で報告をさせていただきたいと思います。

他にございませんか。特にないようでしたらこれで審議を打ち切りたいと思います。様々なご意見をありがとうございました。

今後の計画の推進、それから次期第六次の基本計画への反映等につきまして、皆さんの意見を参考にしながら、取組あるいは審議を進めていきたいと思います。